

訳者あとがき

1. 本資料は、国際的な統計の品質論議における最近の動向のうち、インターネット上に公開されている IMF（国際通貨基金）のデータ品質に関する参考サイト（Date Quality Reference Site: DQRS, 本資料の第 I 部）と、Eurostat（欧州連合統計局）が主催して 2004 年にドイツで開かれた「政府統計の品質と方法論に関する欧州会議（Q2004）」に提出された主要論文（第 II 部）を訳出・紹介し、さらにこのテーマに関連する水野谷による研究論文（第 III 部）を収録している。第 II 部で訳出した 6 つ論文の原文は以下のものである（箇条書きの番号は本資料の章番号に対応）：

2. Johann Hahlen, “Welcome Address”
3. Pedro Díaz Muñoz, “Welcome Address”
4. Svante Öberg, “Quality Issues in the European Statistical System”
5. Johanna Laiho and Anja Nimmergut, “Using Self Assessments for Data Quality Management – DESAP Experiences”
6. Håkan Lindén *et al.*, “Standard Quality Indicators”
7. Martin Karlberg and Laurent Probst, “The Road to Quality – The Implementation of the Recommendations of the LEG on Quality in the ESS”

2. 本資料は、『統計研究参考資料』の中で統計の品質論議をめぐる資料を訳出紹介するシリーズ (No.61, 79, 89) の続編で、特に本号は、IMF・DQRS と Q2001 を取り上げた No.79 の更新版である。IMF の DQRS は No.79 が刊行された 2002 年 9 月当時、開設されて間もなかったが、統計の品質問題に関する重要文献が順次、更新・掲載されるサイトとして注目され、No.79 で訳出紹介された。2002 年以降、このサイトに多くの重要な追加資料が掲載されてきたので、一部は No.79 と重複するが改めて本号で取り上げた。また、No.79 では政府統計の品質に関する初の国際会議である Q2001 の主要提出論文が紹介されたが、この後続会議がすでに 2004 年と 2006 年¹の 2 回開催されている。本号では 2004 年会議（通称 Q2004）の主要提出論文を訳出する。以下では、DQRS と Q2004 を簡単に解説する。

3. 統計品質に関わる IMF の活動については、DQRS をふくめて、本資料の水野谷論文（本資料 9.）で説明された。『統計研究参考資料』No.79 で DQRS が訳出されて以来、多くの参

¹ Q2006 は、英国国家統計局と Eurostat の共催で、2006 年 4 月 24～26 日に英国ウェールズ地方の中心都市カーディフで開かれ、この会議のプログラムおよび報告資料の多くは、Q2006 のサイトで公開されている（URL は <http://www.statistics.gov.uk/events/q2006/default.asp>, 2006 年 7 月現在）。関連して、Q2006 のサテライト会議である、国際機関のためのデータ品質に関する会議が、統計活動の調整委員会と英国国家統計局の共催で、4 月 27～28 日に英国国家統計局（ウェールズ地方のニューポート）で開かれ、プログラムおよび提出論文が国連統計部のサイトで公開されている（URL は <http://unstats.un.org/unsd/acccsub/CDQIO-2006.htm>, 2006 年 7 月現在）。

考情報が追加されてきたが、その中でも筆者が注目する2つの追加情報だけをここでは解説する。1つは、IMFが独自に開発した「データ品質評価枠組」(DQAF: Data Quality Assessment Framework)の更新版(2003年7月版)が公開されたことである。この枠組の草案はすでに2001年3月に発表されており、No.79でも訳出された(Carson and Liuksila論文)。草案から一定の議論を経た結果、一般的枠組(generic framework)と、その一般的枠組を具体的な6つの分野(国民経済計算統計、消費者物価指数、生産者物価指数、政府金融統計、貨幣統計、国際収支統計)に適用した場合の枠組を2003年7月版として公表して現在これが最新版となっている。2003年7月版DQAFについての図解を交えたわかりやすい説明はDQRSに掲載されており、本資料1.の付録で訳出した。もう1つは、このDQAFにもとづいて、多くのIMF加盟国が自国の統計の品質をIMFとの共同作業で評価し、その結果報告書(ROSC: Reports on the Observance of Standards and Codes)をDQRSで公開していることである。ROSCは2001年から始まった事業で、この間に報告書を作成・公表する国が増えて、現在(2006年7月現在)66カ国にも及ぶ。日本は2006年3月付でROSCを公表した。日本の報告書は総務省統計局によって準備され、これをIMF統計部スタッフが承認している。評価対象となった機関と統計は、内閣府経済社会総合研究所「国民経済計算」、総務省「消費者物価指数」、財務省「国際収支統計」、日本銀行「企業物価指数」であり、それぞれの機関と統計がDQAFに基づいて評価され、報告書にはその結果が詳細に記述されている。統計の品質を評価し、その結果を広く統計利用者に公開しようとするこのROSCの重要性は非常に高いと思われる。しかし、ROSCの基礎となっているDQAFは経済統計の品質評価が中心であることに留意が必要であろう。

4. Q2004では、政府統計の品質に関する様々なテーマが議論されている。その中でも注目される動向の1つは、前回のQ2001にLEG(Leadership Group on Quality: 統計の品質に関する指導グループ)によって提出された統計品質についての諸勧告が各統計機関でどのように活かされあるいは実行されてきたのかという点である。この視点に立って、Q2001に提出された数ある論文の中から、わずかだが選んで訳出(本資料5.6.7.)した。また、Q2004の背景を知るために有益と考え、開会にあたっての全体会議に提出された3論文(本資料の2.3.4.)も訳した。特に、欧州における統計の品質論を主導してきた1人である、スウェーデン統計局長のÖberg氏(現在はスウェーデン統計局長を離れ、スウェーデン中央銀行副会長)による論文(本資料4.)には、LEG勧告および品質宣言が改めて示された上で、Eurostatが中心になってこれまで欧州で進めてきた品質活動の経緯が要約され、Eurostatが採用する品質評価の枠組も示されており、大変参考になる。Laiho and Nimmergut論文(本資料5.)では、勧告第15号を受けて進められた、調査管理者による調査の自己評価点検表の開発事業の成果が述べられた。Linden and Papageorgiou論文(本資料6.)では、Q2001以降に品質評価の枠組に必要な指標を具体化する対策委員会がEurostatに設置され、そこで提案された諸指標が説明された。Karlberg and Probst論文(本資料7.)では、22番目のLEG勧告を受けて設立された、諸勧告の実行を推進するグループ(実行グループ)による

実行状況が解説された。上記論文を見ると、統計の品質を改善させるより具体的な取り組みが実行されていることがわかる。しかし、この品質改善の諸活動が継続的に実施されていくかどうかを判断するのは時期尚早だろう。ただし、Q2006あるいはQ2006 サテライト会議の主要提出論文がすでに公開されているので、これらを検討することが筆者に残された重要な課題である。

5. なお、Q2004 のプログラム委員長がこの会議を総括した論文²が参考になるので、ここでごく簡単に紹介したい。この論文によれば、Q2004 には、48 の国や地域から 498 人が参加し、計 41 セッションが組織され、計 128 論文が提出された（Q2004 のプログラム詳細は本資料 8. に収録したので参考されたい）。Q2001 と Q2004 の大きな違いは、Q2001 では統計の品質についての概念化が中心に議論されていたのに対して、Q2004 では、その概念の実行あるいは評価について初めて議論される場であった。そして、Q2004 における議論の特徴として、第 1 に、品質の評価に関する議論が成熟しつつあること、第 2 に、非標本誤差についての報告が会議の主流となっていること、第 3 に、政府統計家と学術研究者の意見交換の重要な場となっていることを指摘する。ただし、第 1 点目については、Linden and Papageorgiou 論文にも言及しつつ、評価する具体的な指標の開発は未だ初期的な段階とみる。また、第 3 点目については、交流を促進するためには、マイクロデータへのアクセスとデータにおける秘匿性の担保とのバランスが課題になるとみる。最後に今後の Q 会議の課題として、測定可能な指標の開発をふくむ、政府統計の体系的で具体的な品質改善の行程表（road map）を提案すべきこと、各国政府の厳しい予算制約の中で品質改善に向けたさらなる投資が必要であること等が示された。

6. 水野谷論文は、経済統計学会が発行する雑誌『統計学』の創刊 50 周年記念号（2006 年発行）に寄稿するために準備され、経済統計学会第 49 回全国研究総会（2005 年 9 月 2～4 日）で報告・配布されたものをベースとしている。この配布論文では先行研究を詳しく紹介・検討したが、記念号に寄稿する際に紙面制約上、多くを削除あるいは縮約したので、本資料にこの配布論文を若干修正した上で改めて収録したいと考えた。配布論文では本資料で訳出した Q2004 の提出論文を紹介し論評を加えたので、配布論文とともに Q2004 の訳出論文と一緒に本資料に収録することで読者の便利になれば幸いである。

7. 最後に、訳出を快く許可して下さった、IMF 出版サービス部局長および各論文の著者に対して深く感謝申し上げます。

8. 本資料は翻訳とあとがきをふくめ水野谷武志（北海学園大学・経済学部）が担当した。

² Grünewald, W. and Thomas Körner (2005), "Quality on Its Way to Maturity: Results of the European Conference on Quality and Methodology in Official Statistics (Q2004)", *Journal Official Statistics*, Vol.21, No.4, pp.747-759.